

## I. 職業訓練と教育評価

職業訓練では、座学や実習授業が実施されるが、いずれも技術系のテーマが多いことから、実機や物理モデルを教具として用いたり、VTRを活用するなど、授業に対して様々な工夫がなされる。限られた時間内にいろいろな教育訓練メディアを提示するため、授業前に内容や説明順序などのいわゆる授業設計を行う。そして、これに準じて授業を実践するわけであるが、設計や実践と同様に重視されるのが、評価である。

さて、本資料では、評価にかかわるコンピュータシステムをまとめているが、設計－実践－評価という授業の3つの側面のうち、あえて“評価”に焦点を当てたのは、次の2つの理由による。

第1は、教育訓練の現場において評価ということに対する関心を高めたい、ということである。職業訓練においてよく話題となる実験教具の開発はむろん重要なことではあるが、そのような可視的成果のほかに、評価といった不可視な教育行為も同様に重視することにより、これまでの職業訓練がより質の高いものに発展してゆくことが期待される。現に、わが国の教育訓練は、評価に対する関心の低さがよく指摘される。

第2は、教育評価に科学的な見方を導入したい、ということである。換言すれば、評価の客観化であり、教師が自分の授業とか開発した教材を、学習者などのいわば利用者の意見なりアンケートなりにもとづいて考察する、ということである。しかしこれは、自己評価という行為が無意味に近いとするものではない。むしろ、各自が行った授業を再検討するにあたり、そのような客観データにもとづいた評価結果を新たな情報として付与することによって、視野がさらに広まることを期待するものである。

次節以降では、アンケートの回答データを処理する評価システムを述べているが、アンケートの構成が所定の枠組に則っていれば、どのような評価対象にでもこれを適用することができる。したがって、教育訓練固有のものとしてとりあげてはいない。特に教育訓練での評価は、自己評価か第三者による評価かはともかく、授業を構成する諸々の要因を網羅的にとりあげてこそ、信頼性の高い結果が得られるものと思われ、アンケートの構成の仕方によっては、はなはだ一面的な評価結果を提供することにもなりかねない。その意味から、本資料でのべる〈あいまいくん〉は、教育訓練評価の補助的存在とみなし位置づけるのが妥当といえる。教育訓練における評価の視点とかアンケートの構成法は、また改めてとりあげる必要があるだろう。

(〈あいまいくん1.1〉は、システム構成上未だ不完全なところがあるが、教育評価を目的として、これを無料で提供することができる。関連の評価の一助となれば、幸いである)